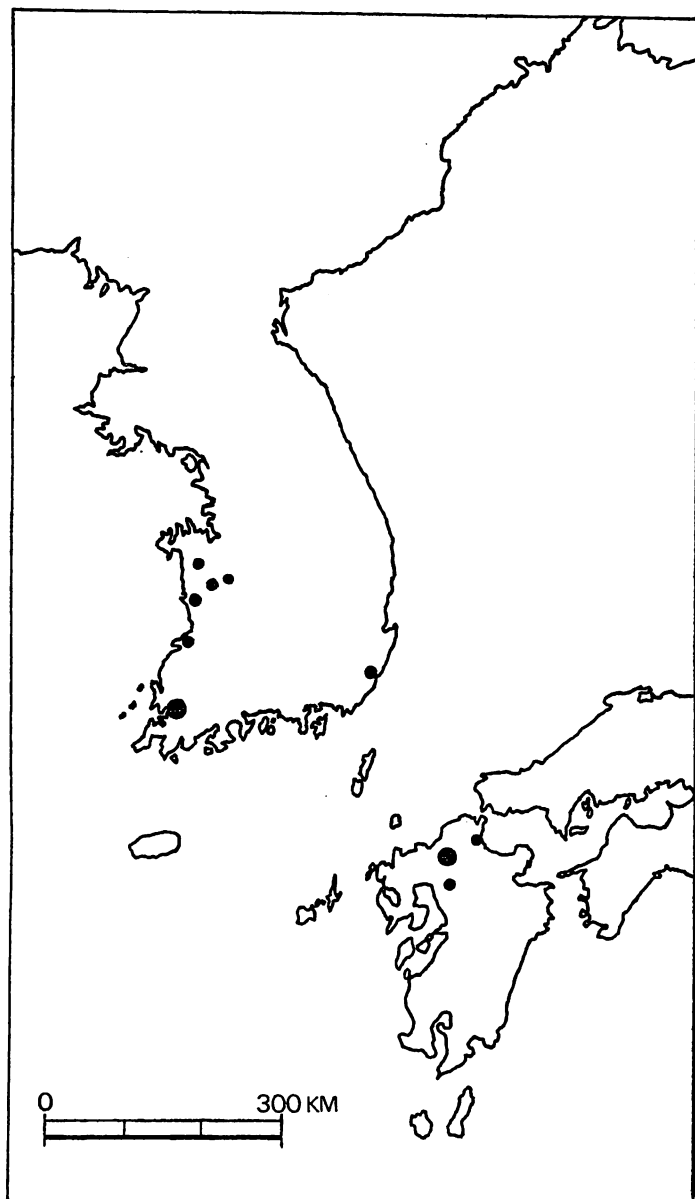


# 三角形石庖丁について

西 谷 正



第1図 三角形石庖丁分布図

1

弥生文化の成立における技術革新の諸相のなかで、いちじるしい現象の一つとして、磨製石器の出現がある。中国大陸で成立し、朝鮮半島で独自に展開した各種の磨製石器群が、日本列島の西端地方に伝播した。とくに北部九州にみられる初期の磨製石器の分析はまた、弥生文化成立と発展の経路や経過、ならびに、朝鮮と日本の関係を具体的に知る手がかりを提供するものである。筆者は、そのような視点にたつて、朝鮮と日本における磨製石器の集成的研究を試図しているが、その一端として、三角形石庖丁の問題をとりあげる。

三角形石庖丁という言葉は聞きなれない術語であろう。弥生時代の稲の穂摘具として知られる石庖丁は、年代や地域によって形態を異にする。ここでとりあつかおうとする三角形石庖丁は、石庖丁のな

かでも、形態や分布状況において特異なものである。直線的な背部に近く二孔をもち、双部が若干ながら外湾することは、石庖丁として通有のものである。しかし、三角形の形態を呈する点に特長があることから、三角形石庖丁と名づけて、他の形式と区別することにした。ところが三角形という形状も、双部のつけ方に起因するもので、そのことがまた、もう一つの大きな特長となっている。つまり、双部は、左右交互、表裏に片双づけされている。双部の中央を起点として、表裏に交互して片双づけを行なう結果として、三角形あるいはそれに近い形態を生むという、形態と双部が表裏一体の関係にあるのである。

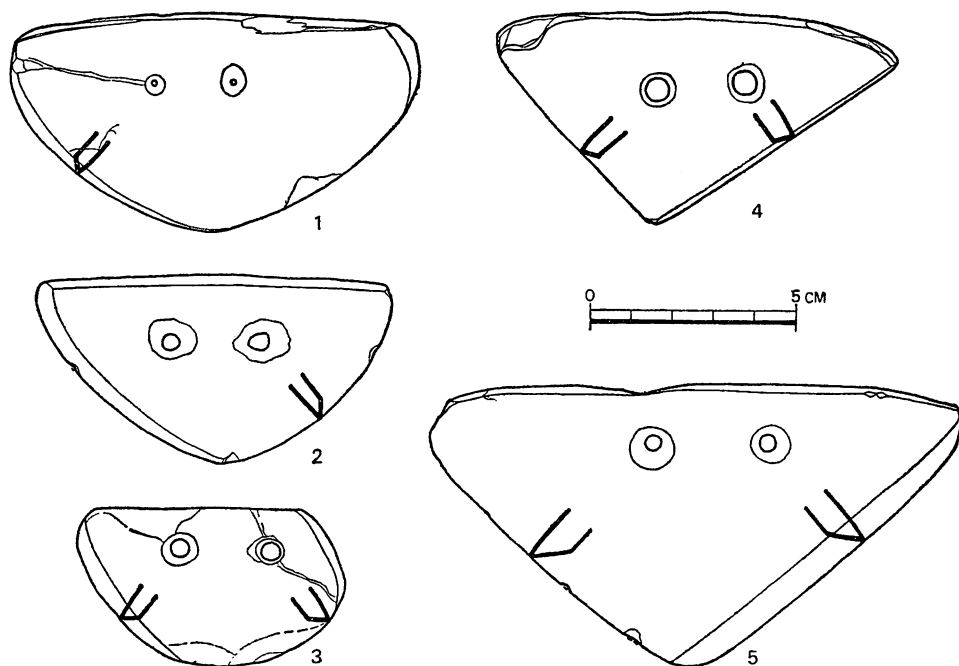
日本の三角形石庖丁の場合、右手でにぎると、双部は上面の左半分、つまり、前方にくるが、裏がえしにしても常にそのような状態になるわけである。使用法については、石庖丁を稲の収穫法という視点から実験的に分析した石毛直道氏の研究がある。氏は、石庖丁が切る道具ではなく、テコの原理を応用した摘む道具であること、そして、石庖丁の片双のどちらの面を利用しても、たいした作業上の差異はないことなどを論証した。その結果、森貞次郎氏がかつて、「此の両面交互片双付けでは、左手でなければ使用出来ず、先端部に近い処を使用して垂直に物を押切る作業にのみ適する<sup>(2)</sup>」とされたことに対して反論した<sup>(3)</sup>。筆者も、石毛氏の見解にしたがって論を進めることにする。

## 2

日本で出土した三角形石庖丁の資料はきわめて少ないが、数例を参考としてみた。

まず、形態をみると、一見して半月形をしているが、詳細にみると、双部の変換点を頂点として三角形をなしている。このことは、二辺の双部が若干ながら外湾しているために、三角の形状が曖昧になったのである。双部をみると、双と直角の方向に、粗い研磨痕を残すことが多い<sup>(4)</sup>。直線的な背部、ならびに、背部寄りの二孔は、普通の石庖丁とかわらないことは先にふれたとおりである。大きさは、比較的小さい。福岡県飯塚市立岩遺跡の一例では、長さ10cm、幅5.4cmを測るが、福岡県八女市室岡西中ノ沢遺跡の出土品のように、長さ6.6cm、幅3.9cmという小形のものまである<sup>(5)</sup>。この場合、小形といっても、長期にわたる使用を物語るひもずれが観察される。材質は、まちまちである。上記の立岩遺跡例は小豆色をした凝灰岩製であるが、西中ノ沢遺跡例は滑石に似た材質である。

ところで、三角形石庖丁を最初にとりあげたのは森貞次郎氏であった。氏は、立岩遺跡の資料を中心として、石庖丁の型式分類を試みた際、半月形石庖丁(一筆者注)から展開したB類のなかに位置づけ、b5類にいたって、「双部の相互片双が極端に強調せられて器形も三角形<sup>(6)</sup>」になるとされ型式学的発展の過程で理解された。三角形石庖丁が石庖丁のある発展段階で出現するという理解からは、その年代について、後出であることを示唆させる。したがって、三角形石庖丁が中期後半に行なわれたという考え方<sup>(7)</sup>もうなずけるのである。最近、福岡県教育委員会が、九州縦貫道建設工事に先だって実施した事前調査に際して、福岡県八女市室岡の西中ノ沢遺跡の弥生時代後期前半でもやや新しい時期の竪穴式住居から、弥生式土器(壺・甕・器台・鉢・高杯)とともに、三角形石庖



第2図 三角形石庖丁実測図

- |                        |                       |
|------------------------|-----------------------|
| 1. 日本・立岩（京都大学所蔵）       | 4. 朝鮮・月松里（ソウル大学校所蔵）   |
| 2. 日本・立岩（九州大学所蔵）       | 5. 朝鮮・出土地不明（ソウル大学校所蔵） |
| 3. 日本・西中ノ沢（福岡県教育委員会所蔵） |                       |

(8) 丁が発見されたことによって、三角形石庖丁の年代の一点が後期前半にあることが明らかになった。しかし、その石庖丁はさきにも少しふれたように、小形で石庖丁として退化した感じを与えるので、最終末のものであると思われる。

つぎに、三角形石庖丁の分布状況をみるため、出土地名を列記すると下記のようなになる。

福岡県飯塚市立岩

福岡県京都郡苅田町東佐与<sup>(9)</sup>

福岡県八女市室岡西中ノ沢

このなかで、立岩遺跡は、石庖丁の生産地として知られるが、三角形石庖丁についても、三例以上を数える。また、三角形石庖丁の未製品もあるところから立岩遺跡で製作されたことがわかる。こうしてみると、三角形石庖丁の分布は、現在のところ、立岩遺跡を中心として、北部九州の福岡県内に限定されることも明らかとなったわけである。

### 3

ところで、日本で発見される三角形石庖丁に類似するものは、朝鮮半島においても認められる。朝鮮では「三角形石刀」<sup>(10)</sup>という名称が使われているように、形状が、三角形をなすものが多い。それも刃部を直線的につけることから、三角形がいつそう強調されたものである。そもそも、朝鮮で

はこの問題を最初にとりあげたのは、崔淑卿氏であった。氏は、朝鮮の石庖丁全般について分析した際に、刃部の形状にしたがって型式分類を行なっている。そこで、C類として刃部が二斜辺にあるものとして位置づけた。これについてさらに、二斜辺刃直線背石庖丁として、とくに一節をもうけて詳述した。それによると、全体の形態が三角形をなして、その二辺に刃をつけたC形式は、中国や日本で類例の知られない特殊なもの<sup>(11)</sup>と評価した。

形態についても少しみてみると、刃部のある二斜辺のなす角度が直角に近い鈍角をなし、文字どおり三角形をなすもの（出土地未詳のソウル大学校所蔵品）、鋭角をなすもの（忠清南道舒州郡東面例、慶尚南道蔚山郡下窟面蔣峴里例）、そして、外湾気味のゆるい角度をもつもの（全羅南道靈岩郡始終面月松里例、全羅南道光州市立博物館所蔵品）などの三型式がある。この三型式については、そのまま年代的序列を表わすものとはいえない。月松里遺跡では、刃部のある二斜辺のなす角度が直角に近いものと、外湾気味のゆるい角度をもつものが共存しているらしい。三型式のうち月松里例や光州市立博物館所蔵品<sup>(12)</sup>などにみられるように、刃部が外湾気味のゆるい角度をもつものは、日本の立岩遺跡出土品と共通した形態をもつものである。刃部をみてもう一つ気づくことは、上からみて常に右側に刃がつけられているので、右手で使用する場合は、常に下面よりつけられた刃<sup>(13)</sup>を利用して作業することになる。実際の仕事量としては差異がないことを石毛氏は論証されたが刃部のつけ方について朝鮮と日本とはまったく逆であることを知ることができるのである。三角形石庖丁の材質についてみておくと、月松里例の場合、一個所で五個発見されているが、材質は珪長岩・砂岩・閃緑岩・凝灰岩とまちまちである。蔣峴里例も砂岩である。

さて、三角形石庖丁の起源に関しては、崔淑卿氏と金元竜氏の二つの見解がある。崔淑卿氏によると、ながい間にわたって単刃の外湾刃直線背半月形石庖丁を使用して得た経験を生かして改良した型式であるといわれる。つまり、半月形の場合、円弧をもったながい刃を平均にまわして使用することは時間がかかり、作業の能率も悪い。そこで、刃の前半部や中央をより多く使用するようになり、その結果、その部分が多く磨滅を受ける。そのため、つぎに後半部に刃をかえて使用しようとする。ところが、使用方法が一定であるのに、単刃の表裏が逆になって、作業に不便をきたし、能率も低下する。また、中心部はいずれにしても二重に使用され、他の部分よりさらに多くの磨滅を受け、刃部全体をあらたにつくらなくてはならなくなる。ここで、刃部の前半部と後半部をとりかえて使用しても、表裏で刃がいれかわらず、また、中心部の二重の使用を防ぐために、二つの斜辺に表裏交互する単刃をつけるように改良して、一つの石庖丁に二つの使用を可能にしたものである<sup>(14)</sup>。以上の崔淑卿氏の見解に対して、金元竜氏はつぎのようにのべている。三角形石庖丁が朝鮮でのみ出土する特殊型式であり、半月形石庖丁から変化したものであるという点では崔氏と共通している。金元竜氏は、実際に半月形石庖丁をみると、前半部が磨滅していたとみられる例はなく三角形石庖丁の発生は、はじめから製作上の簡略化からきたものであると考えた。すなわち、弧形刃より直線刃がつくりやすいので、円弧のかわりに、三角形の二辺を代置したものである。朝鮮の半月形石庖丁のなかには、刃部が相当に大きい緩弧でなく、小さくて急な鋭弧になる例をしばしばみることができる。このようなものからさらに進展して、弧が中心部で角をなす程度になると、そ

れがすなわち三角形石庖丁の発生になる<sup>(15)</sup>のである。

いずれにしても、中国大陸から流入した半月形石庖丁から変化したという見解にたつかり、朝鮮の無文土器文化のなかでも後出の段階ということになる。金元竜氏は三角形石庖丁の年代にもふれている。金海貝塚の時代には、鉄刀子が出現していて、石庖丁を使用する必要がなかった。三角形石庖丁は、発生してまもなく、鉄刀子などの出現によって、普及をみないまま消滅した。つまり月松里の実年代は西暦紀元直前の一、二世紀ごろではなかったかといわれる。鉄刀子が石庖丁にとってかわったかどうか問題であるし、実年代の算出にも論拠がじゅうぶんでないが、いずれにしても、無文土器文化でも終末に近いころの所産といえよう。朝鮮の場合、三角形石庖丁が、学術調査によって発見されたことがなく、したがって、共伴関係なども明らかでない。忠清南道洪城郡八卦里<sup>(16)</sup>では数基の支石墓下で採集されたと推測される石器群のなかに、三角形石庖丁がみられる。しかしこれとて、伴出関係や出土状況は明らかでない。

最後に、三角形石庖丁の分布状況をみるために、出土地名を列記するとつぎのとおりである。

忠清南道扶余郡旧衙里

忠清南道扶余郡窺岩面午水里

忠清南道舒州郡東面

忠清南道公州<sup>(17)</sup>

忠清南道洪城郡八卦里

全羅北道扶安郡<sup>(18)</sup>

全羅南道靈岩郡月松里

慶尚南道蔚山郡下廂面蔣峴里

そのほかに、出土地未詳のものとして、ソウル大学校博物館、国立博物館扶余分館、光州市立博物館などに所蔵されているものがある。上の出土地からいえることは、忠清南道・全羅北道・全羅南道などの海岸地帯、ならびに、黄海に注ぐ錦江流域に分布の中心があり、一例ではあるが、慶尚南道の海岸地帯にもみられる点である。南東海岸地帯の慶尚南道蔚山例は、一つだけとび離れているようにみえるが、海岸つたいの交流を考えると、南西海岸地帯と無縁ではないことがわかる。全羅南道月松里では、一個所で、五個も三角形石庖丁が出土していて、あたかもそこが中心であるかのような印象を与える。

#### 4

日本と朝鮮における三角形石庖丁について、これまでの資料を比較的に通観してここにいたるとき、両者の間に、いくつかの共通点と差異点が指摘できる。すなわち、共通点として、

① 形態が三角形ないしはそれに近い形をとること

② 刃部は片刃であるが、それを左右表裏、交互につけていること

があげられる。このような共通性をどのように理解したらよいであろうか。森貞次郎氏がかつて、立岩遺跡の三角形石庖丁に言及した際、全羅南道において同じようなものが発見されていることか

ら、北九州のものとの密接な関係を考えられた<sup>(19)</sup>。筆者も、三角形石庖丁の特長的な形態と刃部に注目して、それが、立岩遺跡と南朝鮮に出土していることから、北九州と南朝鮮の緊密な関係を強調する際に傍証として利用したことがあった<sup>(20)</sup>。さて、朝鮮の無文土器文化の後半期、日本では弥生時代中期後半ないし後期前半の時期という、ほぼ同一年代において、形態や刃部の特異な三角形石庖丁が、済州・朝鮮・対馬海峡を挟んで、朝鮮半島の西南海岸地帯と北部九州に分布している状況は弥生文化の成立以後もひきつづいて、両者の間に文化的に密接な交流があったことを物語っている。いっぽう、差異点として、

- ① 形態において、日本のものには三角形に近く、また、刃部が若干外湾したものが多いのに対して、朝鮮のものはいっそう三角形が強調され、刃部も直線的であること
- ② 刃のつけ方についていうと、日本のものは、上からみて刃が左側につくが、朝鮮のものは右側につくということ

があげられる。この点に関しては、日本と朝鮮が、それぞれ別個の文化に属していたことを示している。とくに、刃のつけ方が逆の関係にあることは両者の文化的くせ<sup>(21)</sup>として興味深い。

この小考は、石庖丁のなかでも特異な三角形石庖丁に関する単なる現象的な形態論・比較論に終わったが、将来的には、磨製石器全体、否、無文土器文化と弥生式土器文化のそれぞれ独自の歴史的発展における内在的な要因との関連のなかで把握していく必要を痛感している。

なお、この小論は、文部省科学研究費昭和43年度各個研究「朝鮮磨製石器の集成的研究」ならびに昭和47年度奨励研究(B)「九州の弥生文化における大陸系磨製石器の集成的研究」の成果の一部であることを付記する。(1972, 11, 23)

注① 西谷 正、1969「朝鮮半島における初期稲作—その研究史的展望—」『考古学研究』第16巻 第2号、P.108、岡山。

② 森貞次郎、1942「古期弥生式文化に於ける立岩文化期の意義」『古代文化』第13巻 第7号、P. 12、東京。

③ 石毛直道、1968「日本稲作の系譜(上)—稲の収穫法—」『史林』第51巻第5号、P.140~146、京都。

④ 粗い研磨痕については、1972年11月24日の研究会において、下条信行氏が指摘された。

⑤ 福岡県教育委員会、1972『福岡県八女市室岡所在遺跡群調査概報』P. 8、福岡。

⑥ 森貞次郎、1942「前掲論文」P.12。

⑦ 1970年12月29日、森貞次郎氏のご教示による。

⑧ 福岡県教育委員会、1972『前掲書』P. 4~8。

⑨ 1970年12月29日、森貞次郎氏のご教示による。

⑩ 金元竜、1963「霊岩郡月松里の石器文化—三角形石刀を中心として—」『震檀学報』第24号、ソウル。

この論文ではじめて「三角形石刀」という名称がみられた。金元竜、1960「蔚山郡下廂面蔣峴里出土の石器・土器」『海田黄義教先生古稀記念史学論叢』ではすでに、「三角形石庖丁」といわれている。

⑪ 崔淑脚、1960「韓国摘穂石刀の研究」『歴史学報』第13輯、ソウル。

⑫ 筆者が、1968年11月23日に、光州市立博物館で実見した。

⑬ 石毛直道、1968「前掲論文」P.144~146。

- ⑭ 崔淑卿、1960「前掲論文」P.35。
- ⑮ 金元竜、1963「前掲論文」P.140~141。
- ⑯ 崔夢竜、1968「洪城郡八卦里出土磨製石器類」『考古美術』第9巻第1号、ソウル。
- ⑰ 1968年11月19日に公州師範大学で、公州付近出土と伝える一例を実見した。
- ⑱ 1968年11月22日に全羅北道道立博物館において、扶安地方出土という一例を実見した。
- ⑲ 森貞次郎、1942「前掲論文」P.17。
- ⑳ 西谷 正、1968「青銅器から見た日朝関係—弥生文化を中心として—」『朝鮮史研究会論文集』第4集 P.8、東京。
- ㉑ 石毛直道、1968「前掲論文」P.146にすでに指摘されている。古墳時代の鉄鎌をみても、南朝鮮の新羅古墳出土の鎌は、日本の後期のものと同形式であるが、一般的傾向として、基部の折りかえしのむきが逆であることが注意される。西谷真治、1954「農民の生活—鉄製農工具の発達」『世界考古学大系』第3巻 P.53、東京。